

中国的〈関係主義〉に関する基礎的考察

園田 茂人

従来の中国社会研究においては、中国社会停滞論に代表されるように、そのシステム的特性が注目されることがあっても、これを支える社会構成原理としての人間関係から分析が加えられたものはほとんどなかったといつてよい。本稿においては、西洋的〈個人主義〉とも日本的〈集団主義〉とも異なった中国的〈関係主義〉としてこれを単純化・定式化することによって、その特質と起源、ないし近代化の過程においてそれが生み出すであろう諸問題について基礎的考察を行うことを目的とするが、その結果、中国が「後発性の克服」を行うには、予想以上に多くの困難を伴うことが確認されることになる。

0. 序

1. 中国における「関係」の特質とその機能
2. 中国的〈関係主義〉を支える諸条件
3. 近代化過程における中国的〈関係主義〉の諸問題
4. 結語

0. 序

従来の中国社会研究においては、アジア的生産様式論、水利社会論から最近の「超安定システム」論に至る一連の中国社会停滞論に代表されるように、そのシステム特性に注目する議論がある一方で、他方に中国人の個別心理的特性を問題とするいわゆる中国人論⁽¹⁾があり、その双方を架橋する人間関係に注目した分析は皆無といつてよい状態にあった。この点について、我々は既に、従来家族主義 (familism) の強弱といった側面から比較・対象されてきた中国と日本の伝統的人間関係を素材とし、双方に個別主義 (particularism) としての共通の特性を認めながらも、そこに質的な違いが見られるとして、各々「血縁主義」と「系譜主義」と特徴づけるこ

とによって試論を展開した [晨・園田, 1988]。

しかし、この「血縁主義」概念を現代中国の社会構成原理として直接援用するには、以下の二点で問題がある。まず第一に、「血縁主義」はあくまでも伝統的人間関係を特徴づける概念であるがゆえに、これを無批判に利用することが、伝統的要素を強調しすぎるあまり、社会主義革命以降の変化が人間関係にもたらした影響を考慮に入れていないとの批判を引き起こす可能性がある。また第二に、実際、従来よりもいわゆる社会的流動性の増大によって、全体の人間関係に占める非血縁主義的要因の割合が着実に増加しているがゆえに、これをもって「血縁主義的」とすることには困難が存在する。例えば我々が独自に行った大学生に関する意識調査によれば⁽³⁾、「あなたが生活をする上で一番必要なのはどちらか」との問いについて、「家族」と答えた日本の大学生が40.2%に達したのに対し、中国の大学生の場合24.7%を占めるに過ぎず、50.6%の者は「友人」と答えるなど、この数字を見る限りでは日本の方が中国より「血縁主義的」要素が強いことになってしまう。従って、血縁主義を重要な要素とするような、ヨリ

上位の概念を提示せざるを得ないのであるが、本稿においては、以下中国語の「関係(guan-xi)」というタームに注目することにより、中国社会の構成原理を「関係主義」として特徴づけ、これに基礎的な考察を加えることにしたい。

1. 中国における「関係」の特質とその機能

「儒教的な中国人の義務の内容は、つねに、またいたるところで、所与の秩序によって自分に近い関係にある具体的な、生きてまたは死んだ人間にたいする敬虔の情である」といった有名なヴェーバーの言明を引用するまでもなく [Weber, 1920=1971:392]、中国社会においては、農村社会においてのみならず、比較的流動性の高い都市においても「関係」が重視されている点については、多くの論者の共通して認めるところである [Whyte & Parish, 1984]。しかし、この「関係」のもつ一般的特質ないしその機能についての考察はほとんど行われていない。従って我々は、まずこの点から議論を進めてゆかなければならない。

(1) 「関係」には自我と他我とを無意識化させる機能がある。

シューは、「人者、仁也」といった観念が中国において一般的であることに注目し、これをもって中国人の性格を論じているが [Hsu, 1971]、このように、「関係」の存在を前提として「人」が論じられ、しかも或る時は「私のものは君のもの、君のものは私のもの」、また或る時は「私のものは私のもの、君のものは私のもの」といった所有権の曖昧さに代表されるように [楊, 1987]、その領界が漠然としている点に大きな特徴が認められる。従って、西洋的なプライバシーの概念や契約の概念は成立しえず [瞿, 1981]、むしろ中国では、これらは不自然

なものとして認知されることになる。

(2) 「関係」を通じて莫大な社会的資源が移動する。

「関係」は、単なる感情の共有のみならず、富、権力、威信等の広義の社会的資源の共有をもたらす。いやむしろ、社会的資源の共有を前提として「関係」が成立するといっても過言ではない。「太子党問題」に代表されるネオポティズムの横行や⁽⁵⁾、コネ取得のために人々が東奔西走する、いわゆる「走后門」現象等はその端的な例であるが、それほど極端ではないにせよ、物資の調達や情報の収集等の社会的資源をめぐる日常的行為の中で、これを供給する者と供給される者の「関係」は絶えず確認され、その「関係」の度合いに応じて資源の分配が行われている。この点については、「関係」の特質を考える際に最も重要であると言っても過言ではない。

(3) 「関係」によって強い二重倫理が生じる。

このように、意識と資源の共有によって支えられる「関係」は、当然その有無を境にした二重倫理を形成することになる。換言すれば、「関係」の存在は共同体を構成する一方で⁽⁷⁾、「関係」の欠落は必然的に無政府状態を帰結することになるのである。孫文 [孫, 1956] や梁漱溟 [梁, 1982] が、中国人に見られる団結性の欠如を指摘したのは、このような「関係」のネットワークが中国社会全体に拡がっていないことを問題にしてのことであった。

従って、中国社会では「公共性(public)」の概念が成立することなく、しかも「社会契約論」的発想が生まれることがなかったために、多中心的無政府状態を克服すべく、儒教思想やマルクス主義といった、「上からの指導」といった縦の序列づけを正当化する強烈なイデオロギーを国家が絶えず鼓吹し、これらのイデオロ

ギーを内面化した人々によって構成される堅固な官僚制度を生み出さざるをえなかったのも、ゆえなしとはしない。ところが、こうして人為的・操作的に作られた制度も、官僚特権に伴うネオポティズムの跋扈と、それに伴う正当性の相対化といった「関係」による侵食によって、絶えず崩壊の危機を孕まざるを得ず、これが社会変動のダイナミズムを生み出したといっても過言ではない。

またこのように「関係」が二重倫理を生み出すことによって、「関係」のない外の世界に対する無知や無関心、恐怖心を生成し、冒険的・想像的要素の欠如によって特徴づけられる文学〔中野、1974〕と、夜郎自大的中華思想によって特徴づけられる対外認識〔農・園田、1988〕を生む契機となったとも考えられる。

(4)「関係」は「面子(mianzi)」といったフィルターを通じて自我と他我とを結合する。

「関係」が意識と資源の共有をもたらすといっても、そこには没我的性格は見られず、むしろ「面子」を通じての、自我による「関係」に対する相対化のメカニズムが潜在している点を看過してはならない。

ところで、「面子」とは元来「顔(face)」を意味する中国独特の概念であるが、「関係」が自我と他我の二つの「面子」によって構成されているといった自明の理から、「関係」の持つ以下の二つの特徴を導出しうる。即ち、まず第一に、「関係」は双方の自我が他我の「顔」＝「面子」を見ることによって生成・維持されるのであって、絶えず視覚化されているといった特徴を持つ。以前に「顔」を見たことのない人同士には「関係」が存在していないから、そこには全く没交渉の世界が広がることになり、反対に、一度でも「顔」を合わせていれば、非常に親密な世界が広がることになる。これからも、

「関係」によって構成される中国社会が「顔のある」社会であって、現在いわゆる「官僚主義」として問題となっている現象が、ヴェーバーの予想した「顔のない」社会のもたらすそれとは、おのずから性格を異にすることは容易に推察できよう〔楊、1987〕。また第二に、従来「関係」を持っていた他我から資源を調達することができなかつたり、或は感情の共同性を相対化するような、他我による何らかの行為によって自我の「顔」＝「面子」の危機を強烈に意識せざるをえないような場合には、いわゆる「面子」を失った状態となることによって「関係」が維持されなくなるといった特徴をもつ。従って、「関係」は絶えず消滅する可能性を内包しており、その意味では脆い存在であるとも言える。

(5)「関係」は個人を中心にして拮がっている。

以上のような「関係」のもつ諸特徴は、程度の差こそあれ日本においても見られるが、「関係」が個人を中心にして拮がっているのか、それとも「場」に付着しているのかといった点では日本と中国では決定的な違いを見せる。例えば、日本においては結婚や養子といった手続きを行い、姓の変更をすることによって従来の「家」に付着していた「関係」を清算し、新しい「家」で新たな「関係」を形成することが可能であったり、また職「場」を共有することによって「関係」が容易に形成され、その内部の規律に服しなければならないとする「企業一家」的発想が生じ易いのに対し、中国においてはこういった現象は見られない。⁽⁸⁾以上の点については、横山廣子が「類の原理」と「場の原理」として要領よくまとめているが〔横山、1987〕、このように、「場」の共有が必ずしも「関係」の存在を保証しない点に、中国における人間関係の大きな特徴がある。費孝通が、解放前

の蘇州の或る農村において、住居を隣接させかつ水路を共有している人々が、自分勝手にそこで洗い物をする事によって絶えず紛争が生じているといった事例を引きつつ、個人を中心として関係のネットワークが広がっている状態を、「差序格局」といった概念によって説明しているのはあまりに有名であるが〔費，1985〕、このような状況は現在でも看取しうる。例えば、本稿の冒頭で、中国の大学生のうち50.6%が友人を生活する上で最も必要であると答えている点を指摘したが、しかし友人を一番信頼していると答えているのは28.2%、友人と利害関係が最も一致していると答えたものになると12.9%になり、しかも驚くべきことに、「良い友人がいないことに対してどの程度満足しているか」との問いに対して、「非常に不満」、「まあ不満」と答えたものが各々41.2%と18.8%に達しているなど、宿舍、教室とほぼ一日中「場」を共有しているにも拘わらず、そこに感情・資源の共有に支えられる「関係」が、学生全体を覆っているわけではないのである。従って、「学生生活でもっとも大切にしているものは何か」との問いに、日本の大学生の60.2%が「友情」と答えているのに対して、中国人学生の場合こう答えた者が8.2%にすぎず、77.6%が「勉強」と答えているのもうなずける。このように、個人を中心に広がっているがゆえに、「関係」は非常に流動的かつ複雑化するといっても過言ではない。⁽⁹⁾

こうした「関係」の特質が、強い自己肯定意識を生み出している点についても、日本とは大きく異なっている。再び我々の調査の結果を見ると、「あなたは同級生にどのように評価されていると思いますか」との問いに、「怠け者」と答えた日本の大学生が26.4%に達したの対し、中国の大学生の場合わずかに7.1%にす

ぎず、反対に「非常に有能ないし有能な人材」と答えたのが、日本人ではわずか8.1%であったのに対して、中国人では30.6%に達している。また、「あとなが一番信頼しているのはどちらか」との問いに「自分」と答えたのは、日本の大学生では29.9%、中国の大学生では41.2%となっているなど、顕著な違いが見られるが、この点については、日本と中国における青年労働者を対象とした同種の調査によっても、全く同じ傾向が見いだせる。

こうして「関係」は、中国人の中に『個人主義的』で功利打算的に見える行動様式の中にも『面子』（对人的依存関係）を重んじる〔石田，1986:227〕といった、一見矛盾した性格を生み出すことになるのである。

(6) 「関係」の内部では強い横の力学が生じる。

このように、「関係」が個人を中心に広がっているがゆえに、「関係」内部では互いの「面子」を通じて他我が自我に優越する状況を極力避けようとする力学が生じ、結果として強い平等主義的な横の論理が通用することになる。⁽¹⁰⁾これは特に農村部では、解放前においては「均分制」として、解放後においては「吃大鍋飯」として顕著に現れているが、この点で、「原組織」の中に縦の序列化が行われているとされる日本社会と全く異なった特徴を見せることになる〔作田，1973〕。そしてこれが、社会内部における大きな緊張を生む原因となっている点について、最後に少し触れることにしたい。

「関係」が個人を中心に広がってされていることから、強い自己肯定意識が生まれる点については既に指摘した。再び我々の調査データを見ると、「不平等だが自由競争のできる社会と自由競争ができないが平等な社会のいずれが良いか」との問いに対して、後者を選んだ中国の大学生はわずか10.6%にすぎず、非回答5.9%

を除く83.6%が前者を選択しているが、これが自らのパフォーマンスに対する肯定的な評価によって支えられていることは明らかである。しかし一方で、「ではあなたの社会はどちらに属すか」との問いに対しては、後者を選択したのが62.4%にも達しており（非回答14.1%）、これからも潜在的不満の存在を容易に見て取れる。このように「関係」のもたらす横の力学を逃れ、「自由」を獲得すべく外国人との「関係」を通じて海外脱出を計ろうとする中国人の姿はバッテリーフィールドによって生々しく描かれているが[Batterfield, 1982=1983]、ともあれ「関係」が従来大きな社会的不安の源泉となってきたし、これからもなるであろう点については、ここで確認しておきたい。

以上中国における「関係」の特質とその機能を論じてきたが、このように「関係」を中心とした社会の構成原理を<関係主義>と呼ぶことができるのであれば、その性質が西洋的<個人主義>とも日本的<集団主義>とも異なる点を強調して、これを中国的<関係主義>と呼ぶこともまた可能であろう。以下では、その生成・発展を支えた原因ないし条件について考察することにしよう。

2. 中国的<関係主義>を支える諸条件

中国的<関係主義>の思想的源泉は、ひとまず宗法思想に代表される血縁主義思想と、儒教思想とに求めることができよう。即ち前者については、シュー[Hsu, 1970]や楊懋春[楊, 1981]が指摘しているように、社会の「家族主義的性格」は、中国本土のみならず、華僑社会内部にも見ることができるし、また後者についても、元来孔子の説いた家父長的人倫=孝悌が仁愛、即ち「親近なものから疎遠なものへの順

序差等のついた愛情」[戸川・蜂屋・溝口, 1987:29]であり、これが「差序格局」の思想的背景となっていることは想像に難くない。

勿論これらの思想は、解放を境に少なからぬ変容を余儀なくされることになった。例えば血縁中心主義については、イデオロギーレベルにおける、「階級闘争」や社会主義教育運動といった絶えざる反封建主義運動の推進によって、また制度レベルにおける、特に都市内部における核家族化の進行(表1)と、大規模国营企業化、人民公社化の推進に起因するところの家族制度の変質とによって、従来ほどに強い影響力を持ちえなくなっている。また儒教思想についても、儒教内部において、清末から縦の序列化を正当化する上下身分倫理と横の「関係」を重視する共同体的倫理とが分裂していたのが[ibid:401]、地主=家父長の打倒を目的とした社会主義革命を経ることによって後者による統一が行われ、これにマルクス主義的要素が加わるなど(いわゆる儒教的マルクス主義の成立)、その変化には著しいものがある。しかし、解放戦争が伝統的意識をより強く内面化した農民を主体とした農民革命であったことから容易に推察されるように、「出身血統主義批判」[加々美, 1986]としての性格を有する文化大革命でさえ、紅五類、黒五類といった概念自体が示すように、結局は血縁主義と逆血縁主義との対立に始終し、これを相対化するメカニズムが生じなかったし[Madsen, 1984]、また自然科学者の温元凱や方励之、文学者の葉文福、孫静軒といった人々に代表される、従来の横の「関係」がもたらす弊害を痛烈に批判しようとする動きが、マルクス主義に対する造反であり、「ブルジョワ的自由」を鼓吹するものであるとして、一貫して断罪の憂き目にあってきたことからわかるように、これらはマルクス主義的

変容を経ているとはいえ、「関係」を重視するという点で、その命脈を保ってきたと言って過言ではない。

当然のことながら、〈関係主義〉の存在を実質的に支えてきた歴史的な必然性も存在している。

その一つは、中国が農業社会としての悠久の歴史を持っている点に求めることができる。即ち、現在でも全人口の八割が農村に住んでいるが、彼らはその大部分が土地に張り付いて生活している。そこでは農作業の必要性和高い人口圧力ゆえに、集団生活が求められることになり、特に福建や広東といった、従来異民族からの侵入を受けることの少なかった地域においては、同族的村落が多く形成されることになった。⁽¹¹⁾ こうして「関係」が自然と生成されてゆく一方で、農地や墳墓、水利の分配が、ゼロ・サム・ゲーム的性質を持っているために、絶えず個人の利益を意識せざるを得ない状況におかれることになり、「関係」の存在しないところでは、械闘に見られるような闘争が、「関係」の存在するところでは分家に見られるような分裂が、それぞれ発生する土壌が形成されていったのである。しかもこれが長い歴史のうちに、文化的慣性力としての強い「修復機制」[温・余, 1987]を備えることになったのである。

また第二に、打ち続く武闘の歴史も重要な要因として挙げなければならない。即ち、中国においては、日本の中国侵略をも含めた異民族の侵入[李, 1941]、村落間での械闘[仁井田, 1952]、並びに中央政府の苛斂誅求に反対する農民反乱[金, 1985]等、古来武闘が絶えることがなかったのであるが、これが保身的手段としての生活の知恵、即ち「社会的な心意」[村松, 1975:105]としての〈関係主義〉が成立する一因となったことは想像に難くない。

以上の二点については、解放後の毛沢東路線下においても、農本主義の推進と、継続革命の名の下での武闘の続発によって根本的な変化を見なかった言えるであろう。いやそれどころか、以下のような諸原因により、〈関係主義〉の相対化を行いうる機会さえ与えられることがなかったと言っても過言ではない。

まず第一に、社会主義における公有制の原理を極端に徹底化させてしまったために、私的所有に対して大きな制限を加えることになったばかりか、商品経済の発展をも「資本主義の尾っぽ」として切り捨てることになった点。資本主義下においては、私有制を前提としているがゆえに、財の生産から、販売、購入、消費、蓄積に至る一連の経済行為において、合理性追求の名の下での独立した自我が必要とされることになるが、社会主義の公有制原理は、これを「公」の名の下において否定することになった。従って、「関係」から自我が解放される内的契機が失われることになったのであり、「商品経済の発展は、他者に依存し特権を利用する悪弊を打破し、等級制の束縛から人々を解放し、平等の観念を確立させる。何故なら、商品生産は、その生産者の独立性と自主性を前提とし、商品交換の際には買い手と売り手の双方が平等の権利を享受することになるからである」[趙, 1987:4-5]とする反省が、最近になって出てくる直接の原因となったのである。

第二に、社会的流動性が全体としてはさほど大きくならなかった点。〈関係主義〉の相対化は、地域移動や職業移動による「地縁」,「社縁」の形成といった、新しい人との出会いの機会が増大することによって可能となる。従来農村社会においては、G. W. スキナーの言う「市場圏」によって内部が結合していたのに対して、その外部との交渉は殆どなかったことが

あまねく知られているし、またほぼ唯一の地域移動・職業移動の機会を提供していた科挙制度も、その人員選抜の方法の点においては極めて「業績主義的」な性格を有していたとはいえ [Marsh, 1961], 役人の総数が全人口の約2%であったという推計があるほどで、これが大量の社会移動をもたらしたとは決して言えず、むしろ「中間階級の欠如」[宮崎, 1987:260]を生み出すことによって、移動の固定化を帰結したほどであった。しかるに解放後の中国においては、下放運動や紅衛兵運動といった一時的な全国規模での人口の移動が見られたとはいえ、巨大都市化を避け、社会主義の政策の有効性を保証するために、政府が戸籍による人口移動のコントロールを行ってきたため、基本的には大量の地域移動は制限されてきたといつてよい。例えば、比較的移動量が大きいと予想される上海市の例をとってみても(表2)、市全体の人口規模を考えあわせると、決して大きいとは言えない状況であったことが容易に見て取れる。また一方で、その農本主義的政策により、農業従事者比率も大幅に減少することはなく(表3)、高級合作社化、人民公社化といった新しい農業経営体の導入による農村構造の再編成も、結局は農業生産を基礎とするものであったがゆえに、職業移動を通じての<関係主義>の相対化に貢献することができなかつたのである。

そして最後に、対外的閉鎖主義の路線を採用した点。解放後の中国においては、グローバリゼーションへの対応として、西洋的<個人主義>と<資本主義>への強烈な批判を契機とすることによって、国内での統一的アイデンティティの形成と社会的不平等の是正を指向することになったのであるが[園田, 1986], これは当然のことながら、西側世界との接触を拒否することによって始めて可能となつたのであ

て、これによって、外圧による<関係主義>の相対化の機会は保証されなくなった点については言うまでもない。

以上総括すると、中国的<関係主義>は、伝統的な血縁中心主義と儒教思想とを思想的起源としつつも、これがマルクス主義的変容を経ている点において、また私有制の否定、社会的流動性の制限、西洋社会との対決といった社会主義制度に固有の特徴によって温存・強化されている点において、極めて「新伝統主義的」[Waldner, 1986]な特徴を持っていると言えるであろう。

3. 近代化過程における中国的<関係主義>の諸問題

では<関係主義>は、中国にとっての目下最大の課題である近代化を推進する過程において、いかなる問題を惹起することになるであろうか。この点について、若干触れておくことにしよう。

まず第一に、これが市場の健全な発展を阻害する可能性がある点を指摘しなければならない。1984年から1985年にかけての海南島での大掛かりな不正に代表されるように、「関係」の有無が大きな落差を生み出すことに乗じた不法な物資の買い占めや横行し、それに前期商人資本を思わせるような商行為[加々美, 1987]の例は数多く報告されており、1986年2月26日付『朝日新聞』によると、1985年の1月から11月にわたる経済犯罪は26,772件に達し、14,229人が逮捕されたというから深刻である。

第二に、既に触れたように、人為的に作られた近代的組織が、有効に働かない可能性がある。これは一つに、人事に絡む問題として顕在化する。即ち、人事採用に関しては、基本的に国家

による労働の配分という型をとっているが、これが「関係」の有無によって大きな影響を受けているのである。例えば、筆者の知る範囲においても、黒龍江省から北京に出てきた学生三人のうち、国家の規定により少なくとも一人は黒龍江省に戻らねばならないことになっていたとはいえ、三人とも上級幹部との強い「関係」があったために、結局誰一人として戻らず、皆北京で工作单位を探し当てたといった例があるが、このように人事に絡む「関係」の効力には依然として少なからぬものがある。実際我々の調査データにおいても、中国の大学生の八割以上(81.2%)が「貴方が要職についていたとして、能力はないが昔の友人が職を求めてきたとしたら、貴方は職を与えるか」との問いに対して「絶対与える」ないしは「出来れば与える」と答えているのである。また、組織内部が複数の「関係」の集合体に分裂することによって、有機的協働体系が成立しにくいといった点でも問題となる。これは、個別組織内部における、いわゆるインナー・グループ問題としてだけでなく、政府と個別組織の間の「割拠主義」[長谷川, 1985]としても問題化する。『日・中共同研究・青少年労働者の勤労意識調査報告書』によれば、「会社内部の情報に通じていると感じられる職場か」「遅刻したり、怠けたりする人がいない職場か」「日常の仕事をまじめに行っている従業員が多い職場か」との問いに対して、「そうではない」と答えている中国人労働者の割合は各々50.0%、44.4%、34.0%に達しており、日本人労働者の28.0%、24.1%、5.8%といった回答を大きく上回っているし、以上のような条件を強く望んでいる割合は各々18.3%、19.9%、31.9%と、これも日本人労働者の回答率50.4%、58.6%、72.9%を大幅に下回っているのが実状である。そして最後に、組織と

個人との間に絶えず緊張関係が存在している点にも、「関係」のもたらす障害が現れている。例えば、組織の共有財産の破損や私物化の傾向がとみに見られ、また組織全体の利潤があがっても、これを宴会費用に回して食いつぶしてしまう例も少なくない[阪本, 1985]。元来資本主義の悪弊とされた倒産といった制裁措置をなかなか導入しにくい現状とあっては、これもゆえなしとはしない。

従って、従来の「関係」を積極的に利用した組織の設立が必要となるわけであるが、ここで注目されるのが、農村における専業戸や郷鎮企業の興隆である。(表4)からもわかるように、これらの多くは血縁を利用した組織であって、しかも多くの報告が示すように、経済の活性化に大きな貢献をしている点では刮目に値するものがある。しかし、(表5)の示すように、これによって農村社会での経済的不平等が加速化しつつあるといった問題も生じつつあり、「新しいブルジョワ的階層の誕生」[何, 1986]として捉えられつつあるのが現状である。⁽¹²⁾

最後に対外開放に伴う社会的不安定の増大の可能性について指摘しておきたい。「関係」の存在によって莫大な資源が移動することについては再三述べてきたが、ヨリ資源を豊富に有する海外との「関係」の有無によって、大きな財の不平等分配が起こる可能性があることは容易に推測されるところである。実際、解放前においては、いわゆる買弁階級による中国支配が行われたため、現体制は全面的な対外開放を行うことに対して、極めて慎重にならざるを得ないのであるが、これが、指導部内での「改革派」と「保守派」の対立を生み出すなどの契機となっていると言ってよい。「穩定発展経済、鞏固安定団結」が大きな政策課題とならざるを得ないのは、まさにここに原因があると言っても過言

ではない。

以上の諸点から考え合わせると、中国が「後発性の克服」〔園田，1987〕を行うには、その〈関係主義〉の存在ゆえに、予想以上に多くの困難を伴うと言わざるをえないといえよう。

4. 結語

以上〈関係主義〉に関する基礎的考察を行ってきたが、最後にこれと近代化との間に存在する弁証法的関係について述べることによって結語としたい。

中国において、〈関係主義〉を近代化のための原動力とせざるをえないとすれば、当然のことながらその近代化の過程は、西洋や日本におけるそれとは異なったものとならざるを得ない。また一方で、近代化を推進する過程においては、しばしば〈関係主義〉がその桎梏となることによって、〈関係主義〉を改変せざるを得ない可能性がある。

我々は既に、〈関係主義〉の中に、伝統的要素と社会主義的要素とのアマルガムの特徴があることを見てきた。もし中国における近代化が、生産力向上のために「西洋・資本主義的

要素を首尾よく導入しようとする試みであるとするならば、その過程において〈関係主義〉をめぐっての、「中国的伝統」対「西洋的近代」、「社会主義」対「資本主義」といった二本の軸を中心にした摩擦が生じる可能性がある。

1987年10月25日の中国共産党第十三回全国代表大会において、「社会主義の初期段階」といった新しい理論装置をもってヨリ一層近代化を推進することが決議されたが、これは中国的伝統、西洋・資本主義、社会主義といった三要素間の結合関係に新しい解釈を試みたものとして注目される。⁽¹³⁾ともあれ、この結合関係が安定的でありえて、始めて語の真正なる意味での「中国的特色のある社会主義近代化建設」が語りうる点については、言うまでもない。

[付記]

本稿は、1987年7月17日のデータ分析研究会、ならびに同年8月1日の中国近代社会研究会における報告レジュメを基礎にして、加筆・修正したものである。本稿を掲載するにあたり、これらの研究会で有益なコメントを頂いた諸氏、並びに宇野木洋（立命館大学）、木幡伸二（一橋大学）の諸氏に深く感謝する。

(表1) 都市と農村における家族類型の違い

都 市

地点名 類型	東河沿 (北京)	団結湖 (北京)	尖山街 (天津)	張家弄 (上海)	長春街 (上海)	双陽路 (上海)	四福巷 (南京)	如是庵 (成都)
核家族	64.7%	70.7%	77.9%	61.2%	51.9%	70.2%	70.2%	71.9%
複合家族	1.9%	4.4%	0.9%	0.8%	3.6%	2.1%	2.1%	1.7%
直系家族	27.7%	22.4%	15.7%	24.3%	32.8%	23.6%	23.6%	18.9%
その他	6.0%	2.5%	5.5%	13.7%	11.7%	3.7%	4.1%	7.5%

出典：五城市家庭研究項目組『中国城市家庭』405頁

農 村

地点名 類型	四季美 (北京)	角 美 (福建)	上 旺 (浙江)	湾 頭 (江蘇)	石家庄 (山東)	烽 火 (陝西)	安 仁 (四川)
核家族	39.6%	27.8%	35.0%	41.8%	35.6%	27.9%	37.8%
複合家族	0%	5.2%	2.5%	2.4%	6.4%	0%	3.3%
直系家族	58.3%	58.6%	53.8%	48.9%	53.7%	72.1%	48.9%
その他	2.1%	8.4%	8.7%	6.9%	4.3%	0%	10.0%

出典：馬俠「農村家庭結構的變遷」 127頁

(表2) 上海における市区と郊区の間の人口移動量

単位：万人

類別	1954年	1964年	1973年	1982年
郊区から市区へ	3.97	1.36	4.10	5.72
市区から郊区へ	2.33	3.29	5.63	3.37
合計	6.30	4.65	9.73	9.09

出典：『中国人口 上海分冊』155頁

(表3) 農工業労働者構成比率の変化 1952-1984

年度	1952	1957	1962	1965	1970	1975	1976	1978	1980	1982	1984
農業(%)	93.3	93.2	92.6	92.8	90.8	87.3	86.3	85.5	84.4	84.4	83.7
工業(%)	6.7	6.8	7.4	7.2	9.2	12.7	13.7	14.5	15.6	15.6	16.3

出典：『中国統計年鑑 1985』 213頁

(表4) 專業戸と一般戸に見る一戸当りの人口数と家族類型の違い

人口数

家族人口 類型	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人以上
專業戸	0.05%	2.20%	9.43%	18.68%	15.38%	18.13%	18.13%	17.58%
一般戸	4.58%	5.77%	18.80%	13.07%	19.18%	14.98%	7.70%	5.98%

出典：趙喜順「專業戸家庭特点浅析」 357頁

家族に含まれる夫婦の組数

夫婦の組数	0組	1組	2組	3組	4組以上
専業戸	1.65%	74.73%	18.13%	3.30%	2.20%
一般戸	12.48%	77.08%	9.58%	0.70%	0.16%

出典：趙喜順「専業戸家庭特点浅析」 359頁

(表5) 農家一戸当り純収入

類別	戸数	比率(%)
100元以下	2656	7.24
100-150元	3310	9.03
150-200元	3666	10.00
200-300元	7585	20.69
300-400元	6054	16.51
400-500元	4114	11.22
500-600元	2758	7.52
600-700元	1875	5.11
700-800元	1231	3.36
800-900元	812	2.21
900-1000元	592	1.61
1000元以上	2014	5.49

出典：『中国農村社会経済典型調査(1985年)』 11頁

注釈

- (1) その代表的な例として、とりあえず孫隆基 [孫, 1983] 及び柏陽 [柏, 1986] の議論を挙げておく。
- (2) 例えばM. レヴィは、日本と中国の近代化の比較の際に、国家意識の強弱をもってその尺度とし、これによって中国における近代化の遅滞を説明する要因としての家族主義の強さを指摘している [Levy, 1953]。
- (3) 筆者は晨光氏と共に、1987年の6月には中国の南開大学の学部学生100名(回収率85%)を対象にした調査を、また同年10月には日本の千葉大学の学部学生100名(回収率86%)を対象にした調査を、同一の質問紙を用いて行ったが、本稿における数値は、そのデータから利用

したものである。なお、これに関しては「日本と中国における大学生の生活ならびに意識に関する調査」(仮題)と題する論文を現在構想中である。

- (4) 「仁(ren)」とは元来「人(ren)」が二人いることを示すものであるが、これが転じて「人」と「人」の関係を規定する教えとなったと考えられる。濱口恵俊は、シュエのこの議論に注目して、日本の特徴としての「間人主義」の概念を提示したが [濱口, 1982]、本稿では、以下で説明するように、その「間人主義」の形態が日本と中国とでは異なることを強調するために、前者を<集団主義>、後者を<関係主義>として区別している。
- (5) この点からは、解放前と現在とに大きな差異

は見られない。なお解放前の状況については、
[Lang, 1946=1953] を参照せよ。

- (6) この具体的事例は [船橋, 1983] に詳しい。
- (7) 石田浩は、これを「生活共同体」として規定しているが [石田, 1986:28], 石田はその内部における「関係」のメカニズムについては言及していない。
- (8) 勿論、建前としての企業に対する忠誠心はある。例えば、『日中共同研究・青少年労働者の勤労意識調査報告書』によると、「あなたは会社に忠誠心を持っていますか」との問いに「非常にもっている」と答えた日本人労働者が11.2%であったのに対して、中国人労働者の場合これが36.8%に達しているが [日本青少年研究所・中国社会科学院社会学研究所, 1987:136], 後で指摘するように、実際の勤労態度を考慮に入れると、これが真実を表すものとは考えにくい。
- (9) 例えば解放後の指導部内での権力争いは、日本の自民党内で見られるような「派閥」が存在していないがゆえに、非常に流動的なものであった。文革中に「右派」として批判された彭真が、現在左派の保守勢力に属しているなど、このような例には枚挙にいとまのないほどである。
- (10) 例えば筆者の経験した範囲内でも、以下のような例がある。即ち、筆者の友人が中国の大学院生について感じるところを書いてほしいと依頼してきたために、早速「中国人研究生に望むこと」と題する雑文を脱稿し持っていったところ、標題がよくないと言う。合点がいかずに問

い正してみたところ、筆者は既に中国人研究生とは「関係」があるのだから、「望む」などといった高飛車な表現は適当ではないし、むしろ不快感を与えるからやめろと言うのである。外国人の「高飛車」な論評に同意することに慣れてきた日本人の一人であった筆者にとって、この経験は、日本と中国の人間関係の違いを痛感させるに十分であった。

- (11) 本稿では、解放前における「複姓村」が多い華北農村の「地縁的結合」と、「単姓村」が多い華南農村の「血縁的結合」の双方を、その農業を基盤とした生産共同体としての共通性から、〈関係主義〉の原基体として扱っている。勿論、地縁的結合の方が血縁的結合に比べて「関係」の相対化が進んでいるために、その「関係」の性質に差が見られる点については言うまでもない。
- (12) 最近、所有構造の変化に伴って階級構造の変化が見られるとして、新たな階級問題が取り上げられるケースが多く、今回の「七・五計画」では重点研究対象の一つとなったほどである。この点については、「中国における新しい社会学研究の諸潮流」(仮題)の中で論ずる予定である。
- (13) マルクスが発展段階として想定した、前近代、資本主義、社会主義の三つの類型が同時に存在し、三者の間に一定の力関係が働いている点に、中国を含む多くの後発産業化社会の共通性が見られる。この点についての詳しい論考は、別稿にて詳しく展開する予定である。

参考文献

- 柏 陽 1986 『丑陋的中国人』, 湖南文芸出版社。
- Batterfield, F. 1982 *China: Alive in the Bitter Sea.* = 1983 佐藤亮一訳, 『中国人』, 時事通信社。
- 趙 喜順 1987 「農村商品經濟的發展与農民的現代化進程」(『中国的社会改革与社会学的發展研討會』提出論文)。
- 晨光・園田茂人 1988 「中国と日本の伝統的社会關係——その産業化に対する影響との関連から——」, 『中国研究月報』6月号 掲載予定。
- 費 孝通 1985 『郷土中国』(復刻版), 生活・読書・新知三聯書店。
- 濱口 恵俊 1982 『間人主義の社会 日本』, 東洋經濟新報社。
- 長谷川慶太郎 1985 『迷走する中国』, 光文社。
- 何 建章 1986 「所有制結構的調整和階級結構的一些变化」, 何建章編, 『經濟体制改革和社会變遷』, 人民出版社所収。
- 船橋 洋一 1983 『内部——ある中国報告——』, 朝日新聞社。
- Hsu, F. L. K. 1970 *Americans and Chinese: Passage to Differences*, The University of Hawaii Press.
- 1971 “Physical homeostasis and jen: Conceptual tools for advancing psychological anthropology”, *American Anthropologist*, Vol.73, pp.23-44.
- 加々美 光行 1986 『逆説としての中国革命』, 田畑書店。
- 1987 「転換期の中国社会」, 費孝通他著・加々美光行監訳, 『中国の青年・中年・老年——その生活意識調査報告——』, 蒼蒼社所収。
- 石田 浩 1986 『中国農村社会經濟構造の研究』, 晃洋書房。
- 金 觀濤 1985 『在歴史的表象背後』, 四川人民出版社。
- Lang, O. 1946 *Chinese Family and Society.* = 1953 小川修訳, 『中国の家族と社会』, 岩波書店。
- Levy, M. J. Jr. 1953 “Constrasting Factors in the Modernization of China and Japan”, *Economic Development and Cultural Change*, vol.2, iii, pp.167-197.
- 李 達 1941 『中國社會發展遲滯的原因』, 文化論叢社。
- 梁 漱溟 1982 『中國文化要義』, 里仁書局。
- Madsen R. 1984 *Morality and Power in a Chinese Village*, University of California Press.
- Marsh, R. M. 1961 *The Mandarines*, The Free Press.
- 宮崎 市定 1987 『科挙史』, 平凡社。
- 村松 祐次 1975 『中国經濟の社会態制』(復刻版), 東洋經濟新報社。
- 中野 美代子 1974 『中国人の思考様式——小説の世界から——』, 講談社。
- 日本青少年研究所・中国社会科学院社会学研究所 1987 『日中共同研究 青年労働者の勤勞意識調査 報告書』, 日本青少年研究所。
- 仁井田 陞 1952 『中国の農村家族』, 東京大学出版会。
- 阪本 楠彦 1985 『中国農民の挑戦』, サイマル出版会。
- 作田 啓一 1973 「日本人の原組織」, 飯島宗一・鯖田豊之編, 『日本人とは何か』, 日本經濟出版社所収。

- 園田 茂人 1986 「後発産業化社会の近代化と地球社会化——中国社会を例証として——」(第59回日本社会学会・一般報告配布原稿)。
- 1987 「後発産業化社会としての中国の近代化——グローバリゼーションの視点から——」,『比較文明 3』, pp.104-114。
- 孫 隆基 1983 『中國文化的「深層結構」』, 臺山出版社。
- 孫 文 1956 『三民主義』, 北京人民出版社。
- 戸川芳郎・蜂屋邦夫・溝口雄三 1987 『世界宗教史叢書10 儒教史』, 山川出版社。
- Walder, A.G. 1986 *Communist Neo-Traditionalism: Work and Authority in Chinese Industry*, University of California Press.
- Weber, M. 1920 *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie.* = 1971 木全徳雄訳, 『儒教と道教』, 創文社。
- 温元凱・余明陽 1987 「現代化与中国傳統文化”潜結構”的改造」, 『蘭州学刊』 vol.4., pp.33-37.
- Whyte, M. K. & Parish, W. L. 1984 *Urban Life in Contemporary China*, The University of Chicago Press.
- 楊 懋春 1981 「中國的家族主義與國民性格」, 周陽山編, 『中國文化的危機與展望—當代研究與趨向』, 時報文化出版所収。
- 楊 雨純 1987 「論終身制, 家長制和官僚主義」(「中国的社会改革与社会学的發展研討会」提出論文)。
- 楊 中芳 1987 「試談大陸社会心理学研究的發展方向」, 『社会学研究』 vol.4, pp.62-89; 105。
- 横山 廣子 1987 「中国の社会組織」, 諏訪哲郎編, 『現代中国の構図』, 古今書院所収。
- 瞿 同祖 1981 『中國法律與中國社会』, 里仁書局。

(そのだ しげと)